

勝山鶴を愛して放ち遣る圖



至るまで賞玩する程にありにけり當時の市尹甲斐庄飛彈守殿深く此
 勝山は心を懸屨々通ひれ巨多の黄白を費やし綾羅の山を築き錦繡の
 階を造る勢ひありしが一年朝鮮國より縮鴈一羽渡りて献せしものあ
 りけるに甲斐庄氏の銀の籠金の止り木を作り之に入て勝山の許は贈
 りたり名ふし負ふ市尹の勢ひを得たる貴重の鳥なれば悦ぶべしと
 思ひたや勝山は忝けなしとまでみて家内の人々を見せし後ち己が部
 屋へ携へ來り鳥は向ひ鶴よく汝の斯く金銀の籠に入られ人々の寵
 愛淺からざればあはれ仕合者も果報目出たしあんど、云ふ人あれど
 此勝山が身は引據されて汝の哀を思ひやる我年をる廊に居て身は綾
 羅を纏ひ蜀錦を裁り萬づ清らかなを盡すと雖ども憂川竹の虜れの身王
 照君の昔しさへ斯やあらんと涕あり去ば花の都の住居も心は任せぬ
 ときは鬼界が島の暮しと同じ汝が金銀の籠の住居にとて娛かるべ

さう嘸々大空の戀しかるらん我故里のゆかしきよ比てもとて夫の鶴
を取出し遙の空に放ける心の裡こそ冷しくして任侠の行なひと謂ま
くのこ

評曰大官賜之恭以傲於人蓋假爲己勢卑屈心耳其人目下
不之紫髯可制畢丸可斷何面見勝山乎

○木戸公後室

路傍の塙花の情なからん平康の垂柳なんぞ俠あからん昔者石崇の
緑珠あり今や贈從二位木戸君の後室貞松院あり貞松院の元來京師三
本木の歌妓として名を竹松と呼ぶ文久年間尊王攘夷の議起り諸藩の
浪士京師に會同す而して時々三本木に宴會せし刻み竹松屢々之よ侍
し爲に薰陶せられけるよや女あがらも悲歌慷慨しわれ浪士の本意
の如く世の王政も復も夷狄は萬里の外へ除かすと祈りける斯く心根

の雄々しけれ、他の歌妓と異にして、勇壯豁達の人士を慕ひ、梨園弟子、
 艶治郎の如きは之を蔑視して之を侍を屑とせず、木戸孝允君未だ
 桂小五郎と云れしころ同じく藩を脱して京師に在しが、一夕竹松を聘
 して尋常歌妓あらぬを奇とし、深く愛され、屢々宴を侍せしめたり、時
 元治元年甲子の歳、長藩國司久坂等兵を擁して蛤御門を亂し、木戸君密
 かみ之と與かる而して敗走、國司等之に死を、木戸君探偵の嚴なるに由
 て身を置く所を、竹松乃ち君を其家の椽下へ隠し、甲斐々々しく供養
 し、漸やく免るを得たり、已にして君明治の風雲を叱咤し、遂に顯職よ
 昇り及んで再生の恩を感じ、竹松を擧て令閨と爲す、實に慶應四年なり
 明治十年君薨するに及んで、竹松其髮を斷じ、貞松院殿と號す、嗚呼、古今
 歌妓の卑賤よりして玉輿に乗ずる者、少なきを加へ、然れども未だ其
 終を善せし者と聞ず、竹松嬢の如き、其終り華族侯爵木戸正二郎氏の

母堂と仰がれ多くの婢女に傳るゝが如き、空前絶後と謂つべきもの

評曰、句曰、傲霜清節、無人見、終日虛心待、風來、蓋竹松嬢待、木

戸君預言歟

又曰、王者德至、於天和氣感、而甘露尊賢容衆、不失細微、則

竹葦受之、可以貞松院之評評

本朝俠客傳附錄

本傳終る。則ち古寫本及び其他二三の書を抜抄し以て之に附し當時の風俗を想像する資料と爲す

○昔々物語 元祿以前の寫本

昔は奴といふ事ありて大身小身の歴々にも奴あり(白柄組神祇組等を云ふ)下々にも中小姓歩行若黨中間又至迄奴あり下々の奴と云は奉公を能勤め大義成事をも大義と云は或の寒中にて毛拾一ツにて寒さを顔にせず一日食事喰せぬとてもひたるを体せず供先にて嘘にも用立へき命を捨て働のんど廣言借又れきくの奴衆は身持食物ふやけたる生やいらかなる体よし好色の事もなづみ屈たくの氣味あく刀脇差焼刃の強を好む侍道の勇氣常に専とし人も頼まれ又は人の爲よし命を露程もいとはず頭支配を敬まひ親方老人と念頃にし律義な

る人をばいんぎん結構よわしらひ我も代へても人を救ふ徳を貪ぼら
ず氣根達者をはげみ武藝に精を出ま人の勤めがた死事を事とせす
てきとふ者をゆるさず此等其頃のやつこのばんがしらあり十三條の
條目の通り是に叶ふ奴を能き奴とて頭組にも見立らる、總て其頃の
奴は利發に何れも器量にうつげたる奴一人も無しやつこに頭支配人奴
の筋を詮議する故いすきもいさをばげむ其時分浪人或は町人にも若
き利發ある器量ある者羨歎思ひ町奴杯とて有しが御旗本の奴とは風
違ひなり近年の若き衆絶てなしたま〜長き刀をさしてひらくす
る若き衆を見るに髪は役者の風あまぬるき結様帷裳は鹿相只だ金の
一分も人をだましても取そふ顔して賤しきものどもは博るきを打
どか出合て是も錢の少しも取度さうよあさまし死心底ぶり瘦辻番で
丁稚やるふをすつば抜しておどす分よて奴の眞似いらどる事昔の奴

は第一刀脇差きれい又衣裳も下には白無垢をはなさずあかつかぬ小
袖は伽羅杯焼て身持随分奇麗な錢金はしさうな顔少もあくるたゞて
やつこせしなり頭より十三條の掟杯今時のやつこ衆夢々御存有まじ
奴を取組入時へ上は頭より小袖脇差出奴より頭へ藤樽箱着持參又
は箱着ばかりもあり○昔は花見遊山に出るよ小身とても鎗持せ出る
又若き衆も同事なり其内若き衆もし家來不自由の時へ鎗持も侍もあ
ければ六法淨氣に出立ち器量よき草履取斗召連て友四五人よて強氣
ある体にて花見遊山に出る人あれども御旗本の衆は鎗持せぬいあし
○江戸眞砂
延寶年中の治世元和年中大坂落城以後靜謐よして日本始て天下泰平
あり誠に神君の加恩あり然バ武士町人長命の者共強氣の咄し父祖骨
肉を請し者共強氣の形氣失せずして弓を張り腕を撫氣あらくしく

して是を後より男伊達と云ふ出立目立冬は厚く綿を入れ着物一ツ着し
 ゆきましかく夫も膝に過せ大小を地より引ずる程長くして柄は白にて
 巻き利方能と望み先白柄組とて御旗本衆より水野十郎左衛門池田勘兵
 衛近藤登阿陪四郎五郎其外大勢なり又下谷御徒士町より大小の神祇組
 有り淺草筋は幡隨院長兵衛浮世戸平石町より唐犬組三左衛門組より
 て先祖宮部又四郎名主役を勤めて唐犬組なり銀町より生れし働與兵衛
 雷雲八大竹矢之助堀江町小船町牛五郎横車半兵衛芝より大佛四郎兵衛
 八町堀に勘五兵衛本材木町より夢の市郎兵衛堺町に半鐘五左衛門横山
 町より釣鐘彌左衛門大門通りは梅農與四兵衛其外所々大勢一組に六七
 人又十五六人も有り町人も其頃は紗綾縮緬を着し脇差丈二尺より長
 くして落しざし余り所々喧嘩多く千石以下の御旗本へ被仰付制とべ
 死よし役目則馬上にて供廻り多し跡に棒を持せける今の辻番役の事

なり伊達仲間よて是を棒ふりと申けるよし紺屋町の男達此棒ふりを
 むごいめに合せし由夫より金魚組と名附しあり其頃中山勘解由殿と
 て強勢の人を撰で盜賊奉行に被仰付男達をさびしく捕へて殺されけ
 る牛五郎の殊更意趣ありて屋敷にて首を刎られけり首飛で氣味よし
 と呼はりけるよし勘解由殿も大勢を殺せども性根の恐ろしきもの
 と仰せけるよしまた下りの巾着切蠅の如く有りしを一人もあく中山
 殿絶し被申候よし子供迄も勘解由殿といふと恐へしよし男達も相止
 で靜に成る婚禮の水あびせも同停止に成て町人の腰の物へたけ一尺
 八寸迄紗綾縮緬着用停止此勘解由殿の凡三万人余殺し申さるよし
 病氣前を屋敷に色々の化物出て勘解由狂氣よて死去のよし屋敷の小
 川町の由近所屋敷迄も迷惑より本所へ屋敷替相成今に津輕屋敷の
 隣なり

○落葉集

町人脇差さし候儀の如何様の恰好之者より差候と申定よ
有之候哉又は何之差別も無之勝手次第に差候事に候哉今
晚中書付可被差越候難相知候ハ、明日式日相濟次第書付
御城江可有持參候已上

享保五年子六月廿日

戸田山城守

中山出雲守殿
大岡越前守殿

右御書付即日評定所江御城より被遣候に付即刻樽屋藤
右衛門召呼右御書付之趣申渡候
覺

町人脇差さし候儀如何様の恰好より差候と御定の無御坐
候。古來より何差別も無御坐勝手次第指申候然共輕キ者ハ
晝之内は大方差不申夜中杯外江出候節指候儀も御坐候
脇差寸法之儀七十六年以前正保二年酉七月一尺八寸より
長く仕間敷被仰付候然共申傳迄にて觸書留は無御坐候寸
法之儀ハ町人今又其通り相心得罷在候
先年より常々町人刀ハ差不申候併し旅立火事婚禮葬禮杯
之節は刀差候由申傳候五十二年己前寛文八年申三月町人
刀指候は停止ふ付其以後ハ差不申然共旅立出火等之節は
格別之由哉同月刀御免に御坐候

下ケ札

此旅立火事之節刀帶候儀
三十八年以前天和三亥年
八月御停止罷成候

右同年同月御扶持人之町人ハ刀帶候儀御免被仰出候但法

体之者は致し無用ニ并召仕候若黨是又無用可仕旨被仰出候
町年寄共ハ惣町人刀御停止之節も指來候尤若黨も刀指來
候處三十八年己前天和三年二月御扶持人之町人町年寄共
よ刀指候儀御停止罷成今以其通よ御坐候以上

享保五年子六月廿四日

中山出雲守
大岡越前守

○近世奇跡考

(助六狂言考)諸説皆虛忘る延享中板本栢筵一代記をみるに正徳三年
四月木挽町山村座において栢筵二代目はじめて此狂言をする時に年
廿六花屋形愛護櫻と言狂言の二番目に江戸半太夫淨瑠璃よて白酒賣
新兵衛實ハ荒木左衛門に扮する者、いく島某、田畑之助後ハ花川戸助六
よ扮する者市川團十郎、傾城惣角よ扮する者玉澤林彌なり、これ津打半

右衛門が作れる狂言なり此前上方ハ萬屋助六傾城惣角二代紙子と
云淨瑠璃あり、正徳中三浦屋の惣角名妓の聞へ高かりし也、るに、かの淨
瑠璃よもどついで作れるあり狂言中に紙子のあるハ二代紙子といふ
をばのめかせたる作者の意趣とおぼし惜花川戸の助六といふハ淺草
三谷の俠者にしてさして異なる所行もあき者なれども、これも萬屋助
六と同名あるを以て三浦屋惣角よ對して、其名をかりもちひたるもの
、よし彼三谷の助六身まかりし後同所易行院と云淨土宗の寺よ葬け
るよし云々

本朝俠客傳終

明治十七年九月廿七日版權免許
同 年十月 出版發兌

〔定價金六十錢〕

校正並評者

東京府平民

田島象二

神田區五軒町廿番地

編輯人

東京府平民

增田繁三

同區同町同番地

出版人

東京府平民

加藤正七

日本橋區檜物町八番地

發兌人

大坂府平民

大村安兵衛

東區淡路町貳町目

同

東京

小笠原書房

神田區神田五軒町

同

全

兎屋

誠

京橋區南鍋町二丁目

同

全

小林鐵二郎

日本橋區通三丁目

同	神戶	佐々木總四郎	靜岡	勝見儀助
名古屋	片野東四郎	熊谷幸助	沼津	小松浦吉
越後長岡	目黒十郎	高崎	阿波本町	煥平堂
同	覺張治平	上總	下總	坂井萬吉
同	松田周平	栃木	横濱	多々屋喜右衛門
同	繩口屋小左衛門	肥後熊本	鹿兒島	正文堂利兵衛
同	西村六平	神奈川		山中八郎
同	林留吉			師岡伊兵衛
同	佐藤正八			長崎次郎
同	本田勝太郎			吉田幸兵衛
同	伊丹屋藤吉			長谷川寛孝
同	西澤喜太郎			
信濃善光寺	高見甚左衛門			
同	協和堂			
同	同飯田			
同	羽前米澤			
甲府	素月晨平			
岐阜	内藤傳右衛門			
	三浦源助			

旭昇堂新刻發兌書目

重野種堂校閱 高橋先生序文
櫻井能監題辭 安田義和編輯

○高等記 作文軌範 全二冊 定價金八拾錢 遞送料共

世ニ作文ノ書多シト雖モ悉ク音訓ノ假字ヲ諷リ四聲混淆シ語路踏違ヘ加之一口氣ノ
語格ヲ以テ初學ヲ滿誘スルヲ歎キ其弊ヲ矯正セント欲シ古今大家名文ノ簡易ナルヲ
摺撫シ雅訓ナル類語及ヒ助字虛字ノ詳解ヲ揚ケ其道ニ堪能ナル重野先生校閱刪補ヲ
經セシモノナレハ實ニ作文書類第一等ノ良書ナリ

○必携 戲文軌範 全三冊 定價金七拾錢 遞送料共

忽ニシテ料理屋忽ニシテ吳服屋忽ニシテ菓子屋忽ニシテ小間物屋此レ此書ニ排列セ
ル商賣ナリ其商賣ノ引札中有名ナル風來山人馬琴京傳三馬種彦以下數十家ノ傑作
ニ係ル甘カ如ク醉カ如クツント面白キ戲文ヲ掲シナレハ風流雅君一本ヲ求メ玉ヘッ
醉多道士笑評 梅亭金鷲戲著

○妙竹 七偏人 詳裝全一冊 定價金五十錢 遞送料共

臍とんて天ノ舞ハ頤はつれて淵ニ躍るとんな石部の堅造も一度縋を解とればワハ、
是は茶はくいと忽ち顔のままりを崩す妙痴氣林話の滑稽書ハサア此ヲ五サイク娛

覽六廿

十返舎一九著

東海道膝栗毛

銅版全一冊 定價金廿五錢 遞送料共

松齊吟光漫書

南柯亭夢覺校正

通俗漢楚軍談

洋裝完一冊 定價金貳圓 遞送料共

此書ハ漢ノ高祖三尺ノ劍ヲ提サケ豊沛ニ起リ楚ノ項羽子弟ヲ率テ江東ニ蹶起シ互ニ鹿ヲ中原ニ争ヒ數年問活劇ヲ演シタル支那著名ノ軍書ナルヲハ大方ノ夙ニ了知セラル、所ナリ今般之ヲ和譯シ平仮名ヲ附シ童蒙婦女子ニモ會釋シ易キ權仕候御最寄ニ就テ陸續恩給ヲ垂レ玉ハシテ希望ス

梅亭金鷲校閱

南柯亭夢覺編輯

美譚 釜ヶ淵由來

洋裝完一冊 近刻

醉多道士戲評 灰吹亭蛇水編輯

歌舞伎秘事

洋裝完一冊 定價金拾五錢 遞送料共

巖谷一六先生題辭 藤井次郎編輯

唐宋八大家字類大全

全三冊 定價金六拾五錢 遞送料共

從五位巖谷一六先生書

四體千字文

全四冊 定價金四拾五錢

山田空齋公題辭 内海長大編輯

發句明治集

全二冊 定價金四十錢

巖谷一六先生題辭 廣田精知編輯

秋津集

全四冊 定價金壹圓

鳳井五明編輯

撰句百家集

全一冊 定價金廿五錢

廣田精知校閱 青山菊雄校正 安田雷石編輯

明治 五十鈴川集

全二冊 定價金五拾錢

岡本湖月校閱 廣田精知編輯

俳階 古今集

全二冊 定價金二拾五錢

内海長大編輯

俳階 芙蓉集

全一冊 定價金二拾五錢

無事庵鶯笠校閱

響瀨堂涼坪校正

語石庵精知編輯

○發句題 砂子集 全二冊 定價金四拾五錢

○雪中庵梅年編選 其角堂永機編纂 古今圖書 發句五百題 全四冊 定價金九拾錢

○蜀山人著述 狂歌指南 濱のきさごと 全一冊 定價金拾五錢

○谷 鎌洲著 東京名所圖繪 全一冊 定價金廿五錢

○廣田精知編輯 和歌俳階節用集 全二冊 近刻

○内海長編纂 俳階詞の玉緒 全二冊 近刻

○同 明治俳諧鯉鱗發句大全 全二冊 近刻

山田空齋公題辭 讀馬經一節松岡 松尾海藏社



特 13

257

本朝侠客伝

国立国会図書館

091366-000-7

特13-257

本朝侠客伝

醉多道士/編

M17

DBN-2264

